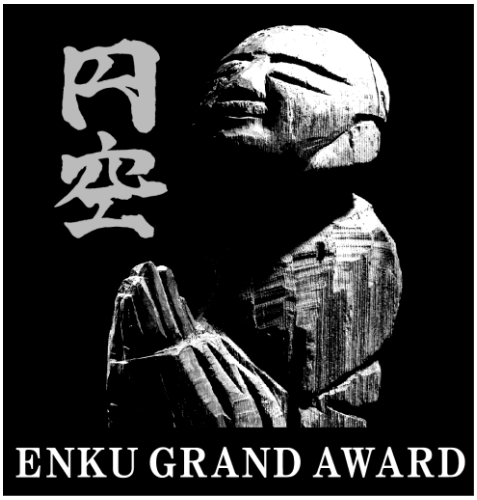
第6回円空大賞
受賞者の選評及び
作家略歴・作品写真



● 選　　評 ……1

○ 円空大賞　フランス・クライスバーグ ……2

○ 円 空 賞　高山　登（たかやま・のぼる） ……4

○ 円 空 賞　田中　泯（たなか・みん） ……6

○ 円 空 賞　流　政之（ながれ・まさゆき） ……8

○ 円 空 賞　林　武史（はやし・たけし） ……10

第６回円空大賞の選評

選考委員長　梅原　　猛

円空大賞は第6回を迎えるにいたった。この賞は土地に根ざした力強く創造的な作品を顕彰するものであるとともに、時流に乗った軽少な作品を拒絶するものである。
今回もまた、現代という時代に挑戦する荒々しく創造的な力のみなぎった作家を選ぶことができたとわれわれ選考委員は喜んでいるのである。

○円空大賞　　フランス・クライスバーグ

大賞となったフランス・クライスバーグ氏は現代の世界を代表する芸術家であるといってよいが、それ以上に身をもって文明の誤謬を訴える思想家でもある。1921年、ポーランドの貧しい家庭に生まれた彼の家族全員はホロコーストで殺されが、彼はソ連兵となったりポーランド兵となったりして生き永らえる。終戦後、ヨーロッパ各地を転々とするが、1948年、ブラジルに移住する。それは、彼が現代のもっとも深い病、自然破壊の病が酷烈に表れた熱帯雨林で生活し、現代文明が生み出した自然破壊の運命の恐ろしさを警告するためである。

彼の作品には二つの傾向があるという。一つは、現代の人類の原罪ともいえる自然破壊の不気味さを訴える作品であり、もう一つは熱帯雨林のすばらしさを表す作品である。いずれも抽象的表現方法をとっているが、見る者の心を圧倒せずにはおかない。

○円空賞　　高山　登（たかやま・のぼる）

高山登氏は不思議な作家であるといえる。彼は主として使い古した鉄道の線路の枕木をもって作品を作る。この鉄道という文明の利器に長い間圧殺されてきた枕木に彼はあたかも生命の根源を見ているかのように、その枕木を組み合わせて、不思議な風景を現出する。枕木はあたかも人間や動物や草木のように命をもち、圧殺されたその生命の再生を訴えているかのようである。彼の作品に「遊殺」と題されたものがあるが、彼は、文明によって圧殺された現代の生きとし生けるものを遊びによって復活させようとするのであろうか。

○円空賞　　田中　泯（たなか・みん）

田中泯氏の活躍は凄まじい。モダンバレエはたしかに海外からもたらされた芸術であるが、彼はそれをみごとに土着の芸術に変化させたのである。まさに日本の土地が田中泯という人間になって踊っているかのようである。あるいは都会の近代的な建物群の真ん中で、あるいは南方熊楠と縁のある紀州の海で、彼は狂ったように自由にはばたいて踊るのである。この土地に根ざした異様な身体の芸術を創出した田中氏は円空賞にまことにふさわしい芸術家であると思う。

○円空賞　　流　政之（ながれ・まさゆき）

流政之氏は巨大な御影石で現代世界を表す彫刻家といえよう。彼の代表作と思われるニューヨークの世界博に出展された「ストーンクレイジー」という作品は、まさに岩肌をむき出しにした巨大な御影石の塔ときれいに研磨された穴の空いた石などを対比させる。ゴツゴツした巨石は、日本では縄文時代から神の宿るものと信じられてきた。その傍らに立つ研磨された石は現代の文明をシンボライズするものであろうが、彼の彫刻の根幹には現代という時代に生きる日本の伝統が息づいているように思われる。

○円空賞　　林　武史（はやし・たけし）

林武史氏の彫刻作品は石を素材としているが、その石は空に屹立する石ではなく、地にささやかに並べられた石である。その石によって林氏は、水田や歩く人などを表現する。林氏は、長い間稲作農業を営んできた日本人の長い歴史をさりげなく表現しようとするのであろうか。これらの作品の中には彼の日本人に寄せる愛情とユーモアがあふれているように思われる。

フランス・クライスバーグ

フランス・クライスバーグ
Frans　Krajcberg

在住地	ブラジル（バイア州） ＊ポーランド生まれ／ブラジルに帰化
生　年	1921年
職　業	彫刻家・熱帯雨林保護家

選　評

大賞となったフランス・クライスバーグ氏は現代の世界を代表する芸術家であるといってよいが、それ以上に身をもって文明の誤謬を訴える思想家でもある。1921年、ポーランドの貧しい家庭に生まれた彼の家族全員はホロコーストで殺されが、彼はソ連兵となったりポーランド兵となったりして生き永らえる。終戦後、ヨーロッパ各地を転々とするが、1948年、ブラジルに移住する。それは、彼が現代のもっとも深い病、自然破壊の病が酷烈に表れた熱帯雨林で生活し、現代文明が生み出した自然破壊の運命の恐ろしさを警告するためである。

彼の作品には二つの傾向があるという。一つは、現代の人類の原罪ともいえる自然破壊の不気味さを訴える作品であり、もう一つは熱帯雨林のすばらしさを表す作品である。いずれも抽象的表現方法をとっているが、見る者の心を圧倒せずにはおかない。

作家略歴

1921	ポーランドに生まれる
1945-47	ドイツ・シュトゥットゥガルトのアカデミーでウィリー・バウマイスターに学ぶ
1948-52	サンパウロに移住
1952-56	パラナのジャングルに一人で住み、製紙工場のエンジニアとして働く
1957	サンパウロのビエンナーレで絵画部門のグランプリを、さらに、リオデジャネイロとサンパウロの現代美術会で1等賞を獲得
1958	この年よりパリとブラジルで生活
1964	イタリアのベニス・ビエンナーレで、ベニス市賞を受賞
1972	ブラジル・バイア州の南部、ノヴァ・ヴィソーザに移り、現在も在住
1973	サンパウロにて1972年優秀展覧会賞受賞
1978	ピエール・レスタニやセップ・バーンドレックと共にリオ・ネグロ・マニフェストを作成、署名
1983	ウルグアイ、モンテネグロの現代アート美術館のイベロアメリカ・ビエンナーレで版画部門において賞を受ける
1986	マットグロッソへ旅行。そこで焼畑農業について取材し、「ナチュラ」において写真を公開
1987	ウォルター・サル・Jrとともにマットグロッソを旅し、「クライスバーグ～遺跡の詩人」を撮影
1990	モスクワのエコロジー国際会議に参加
1998	サンパウロのオ・エスタード紙により、マルチカルチャー賞を受賞
2002	パリにて、ブラジル大使館よりリオブランコ勲章、コメンダドール位を授与される パリ市に作品を寄付
2003	クリチバ市に作品を寄付 クリチバ市の後援により、フランス・クライスバーグ・スペースを公開 パリ市の後援により、モンパルナス美術館にクライスバーグ・スペースを公開

第６回円空大賞　　ﾌﾗﾝｽ・ｸﾗｲｽﾊﾞｰｸﾞ
円空大賞　　Frans Krajcberg

「Sculptures」
（木・天然顔料）

第６回円空大賞
円空賞

たかやま・のぼる

高山　登

Noboru Takayama

在 住 地	日本（東京都江東区） ＊東京都　生まれ
生　　年	1944年
職　　業	美術家・造形作家

選　　評　高山登氏は不思議な作家であるといえる。彼は主として使い古した鉄道の線路の枕木をもって作品を作る。この鉄道という文明の利器に長い間圧殺されてきた枕木に彼はあたかも生命の根源を見ているかのように、その枕木を組み合わせて、不思議な風景を現出する。枕木はあたかも人間や動物や草木のように命をもち、圧殺されたその生命の再生を訴えているかのようである。彼の作品に「遊殺」と題されたものがあるが、彼は、文明によって圧殺された現代の生きとし生けるものを遊びによって復活させようとするのであろうか。

作家略歴

1944	東京都豊島区に生まれる
1968	東京都芸術大学美術学部油画科卒業
1970	東京芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了
1970	戸塚スペース’70（横浜）企画・出展．現代美術の動向展（京都国立近代美術館）出展
1971	第11回現代美術展（東京都美術館）出展
1973	第8回パリ国際青年ビエンナーレ（パリ国立近代美術館）出展
1976	シドニービエンナーレ（ニューサウスウオールギャラリー・オーストラリア）出展
1978	第6回現代彫刻展（神戸須磨離宮公園）出展
1979	今日の作家’79（横浜市民ギャラリー）企画・出展
1984	現代美術の動向：1970年以降の美術（東京都美術館）出展
1987	国際鉄鋼彫刻シンポジウム（八幡高田高炉記念公園・北九州）出展
1991	インターナショナルスタジオプログP.S.1MuseumN.Y
1995	１９７０年ー物質と知覚（岐阜県美術館・広島現代美術館・北九州市立美術館ほか）出展 ASIANA:Contemporary Art from Far East ベニスビエンナーレ出展
1996	日本１９７０ー物質と知覚（サンテイテイエヌ美術館・フランス）出展
1997	Hybrid&Wood（光州ビエンナーレ）出展
2000	Mann&Space（光州ビエンナーレ）出展．高山登展（リアスアーク美術館・気仙沼）出展
2001	みちのくアートフェステイバル2001（みちのく杜の湖畔公園・宮城）企画・出展
2003	アート宮城2003（宮城県美術館）出展
2005	もの派ー再考（国立国際美術館・大阪）出展
2010	高山登展300本の枕木ー呼吸する空間（宮城県美術館）出展

第６回円空大賞　　高山　登
円空賞　　Noboru　Takayama

「遊殺　高山登展300本の枕木ー呼吸する空間展より」

2010年／宮城県美術館
（木・鉄・コンクリート）

「インドネシアの島々にて45日間おこなった場踊り」より
©原田大三郎

たなか・みん

田中　泯

Min Tanaka

在 住 地	日本 （山梨県甲斐市） ＊東京都　生まれ
生　　年	1945年
職　　業	ダンサー

選　　評　田中泯氏の活躍は凄まじい。モダンバレエはたしかに海外からもたらされた芸術であるが、彼はそれをみごとに土着の芸術に変化させたのである。まさに日本の土地が田中泯という人間になって踊っているかのようである。あるいは都会の近代的な建物群の真ん中で、あるいは南方熊楠と縁のある紀州の海で、彼は狂ったように自由にはばたいて踊るのである。この土地に根ざした異様な身体の芸術を創出した田中氏は円空賞にまことにふさわしい芸術家であると思う。

作家略歴

1945	3月10日、東京大空襲の日に東京都に生まれる
1960年代	クラシック・バレエを学び、その後モダンダンスを学ぶ
1966年～	ソロダンス活動開始
1970年代	「ハイパーダンス」と称して、新たな独自の踊りのスタイルを発展させ、意欲的に展開
1978	海外での最初のデビューとして、『パリ秋季芸術祭「日本の間」展』に招待参加（磯崎新・武満徹プロデュース、ルーブル装飾美術館にて）

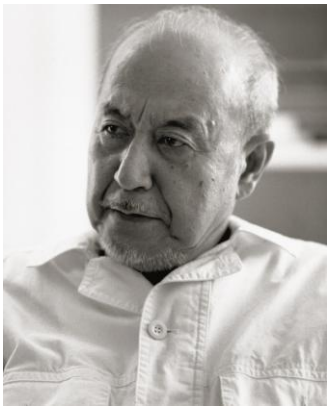
それ以後、今日に至るまでダンス界だけに留まらずあらゆる分野で活躍
日本国内、世界各地では独舞、またグループ作品の公演も多数行う
田中泯は、有名性に頼らず、より根源的な自身の踊りの追求として「場踊り」を現在も継続している
土方巽に私淑

第６回円空大賞　　田中　泯
円空賞　　Min Tanaka

©Shiho Ishihara

「鹿児島県串木野にて場踊り」

第６回円空大賞
円空賞



ながれ・まさゆき

流　政之

Masayuki　Nagare

在 住 地	日本（香川県高松市） ＊長崎県　生まれ
生　　年	1923年
職　　業	彫刻家

選　　評　流政之氏は巨大な御影石で現代世界を表す彫刻家といえよう。彼の代表作と思われるニューヨークの世界博に出展された「ストーンクレイジー」という作品は、まさに岩肌をむき出しにした巨大な御影石の塔ときれいに研磨された穴の空いた石などを対比させる。ゴツゴツした巨石は、日本では縄文時代から神の宿るものと信じられてきた。その傍らに立つ研磨された石は現代の文明をシンボライズするものであろうが、彼の彫刻の根幹には現代という時代に生きる日本の伝統が息づいているように思われる。

作家略歴

1923	長崎県に生まれる
1943	海軍飛行科予備学生、操縦専修となり、ゼロ戦パイロットとなる
1962	日本建築学会賞受賞
1964	ニューヨーク世界博日本館の壁面「ストーンクレージー」（世界博ベストワークに選定）
1967	TIME誌で、日本を代表する文化人の代表の一人として選ばれる
1974	日本芸術大賞受賞
1975	ニューヨーク ワールド・トレード・センターに「雲の砦」を制作
1978	日本アカデミー賞協会設立メンバーとなり、トロフィーのデザインをする 中原悌二郎賞受賞
1983	吉田五十八賞受賞
1994	長野野外彫刻賞受賞
1995	鳥取県景観大賞受賞
2001	9.11アメリカ同時多発テロで、ニューヨーク ワールド・トレード・センター「雲の砦」も攻撃に巻き込まれる
2002	北海道東大沼に、彫刻公園「ストーンクレージーの森」をつくる 岐阜県多治見のギャラリーオー工房と画廊不知火で「NAGARE展」
2004	北海道立近代美術館に「雲の砦jr.」として甦る 北海道立近代美術館にて「NANMOSA NAGARE展」
2006	コールテン鋼の「バチ」がセントルイス大学にたつ
2009	高松市美術館にて「流政之展」
2010	広島県の呉カントリークラブに「セトサキモリ」をたてる 徳島県の四国霊場21番札所 太龍寺に「山さきもり」をたてる

第６回円空大賞　流　政之
円空賞　Masayuki　Nagare

「雲の砦」

1975年／ニューヨーク ワールド・トレード・センター
4300×10000×5000
（ミカゲ石）

はやし・たけし

林　武史

Takeshi Hayashi

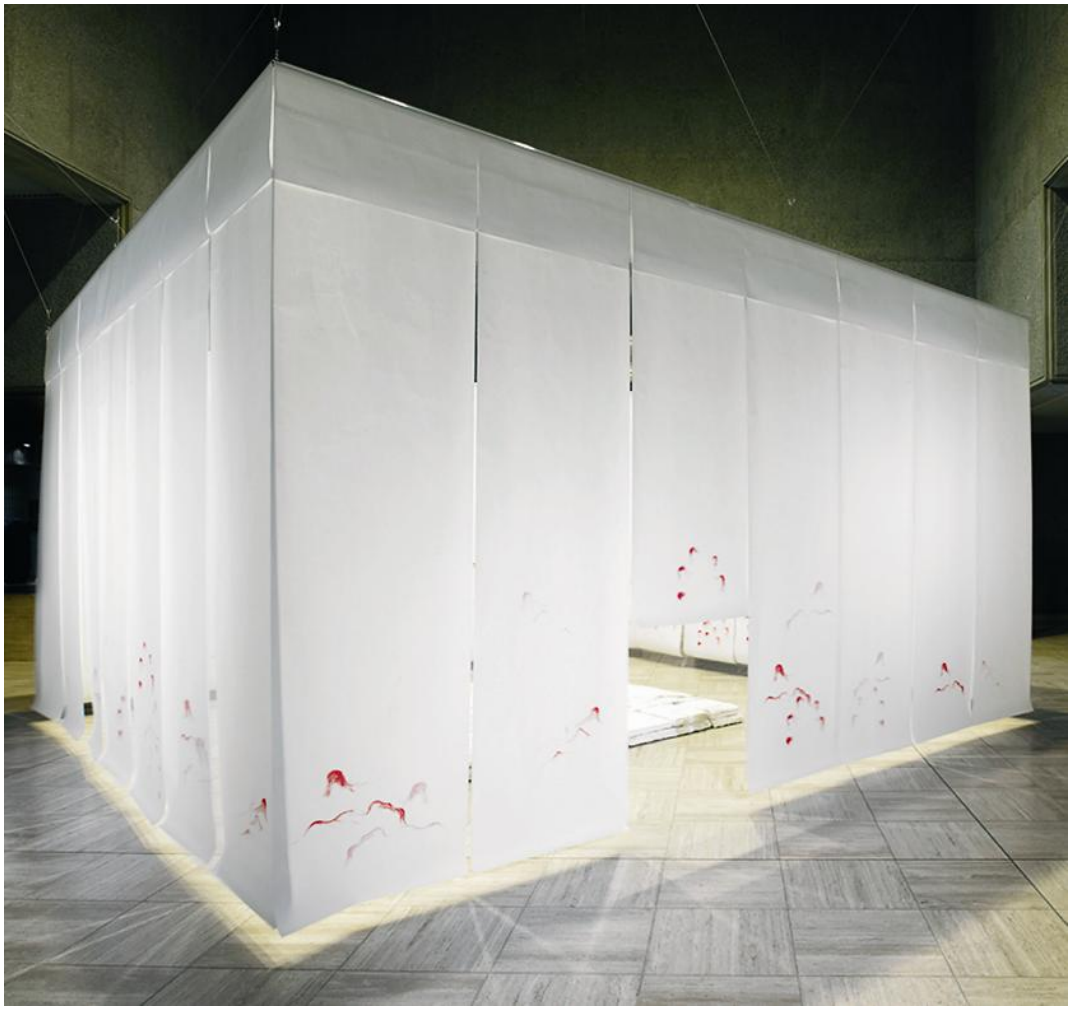
在 住 地	日本（埼玉県さいたま市） ＊岐阜県　生まれ
生　　年	1956年
職　　業	彫刻家

選　　評　林武史氏の彫刻作品は石を素材としているが、その石は空に屹立する石ではなく、地にささやかに並べられた石である。その石によって林氏は、水田や歩く人などを表現する。林氏は、長い間稲作農業を営んできた日本人の長い歴史をさりげなく表現しようとするのであろうか。これらの作品の中には彼の日本人に寄せる愛情とユーモアがあふれているように思われる。

作家略歴

1956	岐阜県岐阜市に生まれる
1982	東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了
1997	個展（東京画廊、ギャラリーなつか・東京）
1998-99	文部省在外研究員としてパリに滞在
1999	「30周年記念展-森に生きるかたち」（箱根彫刻の森美術館・神奈川）
2000	第3回光州ビエンナーレ（光州市立美術館・韓国）出展
2001	個展「水田」（ヨコハマポートサイドギャラリー・神奈川）
	「求心力/遠心力　うらわと現代の美術」（うらわ美術館・埼玉）出展
2002	「東日本-彫刻　39の造形美」（東京ステーションギャラリー・東京）出展
2002-03	「みちのくアートフェスティバル2002高山登×林武史」（国営みちのく杜の湖畔公園・宮城）
2003	「彫刻の身体」（東京藝術大学大学美術館陳列館・東京）出展
2004	「表現から表現へ　小清水漸＋林武史」（ヨコハマポートサイドギャラリー・神奈川）
2006	個展（伊勢現代美術館・三重）
	個展「石間」（東京画廊＋BTAP・東京）
2007	個展「雨の記憶」（Gallery HIRAWATA・神奈川）
	第22回現代日本彫刻展’07（宇部・山口）にて毎日新聞社賞受賞
2008	個展「大地の記憶」（キタニ・岐阜）
	「彫刻・林間学校」（メルシャン軽井沢美術館・長野）出展
2009	「MILESTONE」(Edinburgh College of Art・ UK)
2010	「STONE project Exhibition」(Yorkshire Sculpture Park, Pier Centre Orkney, Cass Sculpture Foundation・ UK)
2011	「林武史　石の舞・土の宴」展（岐阜県美術館・岐阜）

第６回円空大賞　　林　武史
円空賞　　Takeshi　Hayashi



「紅の庭」

2011年／岐阜県 岐阜県美術館
6300×6300×3500
（リトグラフ・美濃和紙）